

まず「書いてみる」生活—「読書」だけではもったいない 鷲田 小彌太

■なるほどと思う著者の意見。

楽しむ、たんに時間を浪費するために読書をする。これが読書の神髄だと思う。

書く技術文章の極意は、コピーなのです。

読まない人に書く神はやってこない。

■これも、なるほど、と思う。

ならば、司馬さんの歴史小説の中に、司馬さんを見いだすことができなんでしょうか？ そう思いつつ司馬さんの小説を読んでゆくと、どのページにも司馬さんが登場してくるのに気がつきます。もう少しいうと、司馬小説のなか以外の司馬さんは、司馬さんという名前や肉体をもっているが、司馬さんの小説の中味と比べると、何と貧相なことか、と歎息せざるをえないのです。もし司馬さんが小説を書かなかつたら、司馬さんは何ものでもなかつたのではないのでしょうか？

同じことは、あなたや私の人生についてもいえるのではないのでしょうか？ あなたが何を書こうと、そのなかにあなたが現れるのです。極端に言えば、そのなかにはあなたは見れないのです。

■著者の文章術。そして「本を書くということは、最初から大赤字を覚悟の『所業』なのです。」と言い切ってしまう割り切り。

課題が与えられ、それを書いてゆこうとするとき重要なのは、自分の視点をもつということです。「視点」(ビューポイント viewpoint) といいましたが、「立場」(ポジション position) であり、「視角」(アングル angle) です。みな同じ意味なのです。

つまりレンガを積み上げてゆく場合の、「完成」(エンド) を視野に入れた全体見取り図です。「図」はピクチャー(面) やプラン(表) である必要はありません。ワン・フレーズ(一主命題) でいいのです。その主命題に三本の章命題がつき、三本の章命題にさらに三本ずつの節命題がつくと、プラン基本表(table of contents=目次) ができあがります。これで、柱=命題が合計一三本立ったことになります。一本の命題を三枚で書けば、約四〇校の文章が、全体の統一が保たれ、それぞれの章、節も論理が一貫し、細部まで全体を貫く意志(視点) が浸透する、ということになります。私の三分割式文章術です。

どんな短い文章でも、どんな巨編でも、全体を貫く「視点」がないと、一字一字をどんなに慎重に積み上げていっても、全体と細部は結び合うことがなく、まったく首尾一貫しない、
・・・

書くには、第一に労力、第二に時間、第三に書斎や万年筆や原稿用紙の類、第四に文献や資料、第五に取材・調査、第六に郵送、等々というように挙げたらきりがなく、費用がかかります。これを労働時間と事務用品費等に換算して勘定すると、一冊書き上げるのに、半年要したとしたら、五〇〇万円程度の人件費に相当します。すべてを換算すると、大変な額になるでしょう。

しかし、右に記した書くための費用は一切出ません。ということは、本を書くということは、最初から大赤字を覚悟の「所業」なのです。所業というのは、褒められた仕事ではないという意味です。

私の処女作は、売れたのです。全部で五〇〇〇部に満たなかつたと覚えています。四刷まで行ったのですから、奇蹟じゃないか、と思えました。初刷が一八〇〇部で、印税は八パーセント、二刷から一〇パーセントになりました。これはいちおう専門書ですから、こんなのは例外に属します。それでも、この本を書く労力等に換算したら、とてつもない赤字でした。